

合田強の『西洋医述 卷三』の解題と翻刻

板野 俊文、田中 健二

香川大学

はじめに

本稿では、江戸中期の讃岐の医家であった合田強の著した『西洋医述』について述べる。これは合田強^(註1)が宝暦十二年(一七六二)正月より同閏四月末まで長崎を訪れ、阿蘭陀大通詞である耕牛吉雄永純^(註2)と、その弟の蘆風吉雄永章の成秀館で学んだ講義録であり、五巻からなるもののなかの第三巻である。この講義録をまとめて一巻として残された本が『紅毛医言』である^(註3)。『紅毛医言』は『解体新書』の発刊に先立つこと十二年前に書かれた『蘭方内科に及ぶ者』としては嚆矢である^(註4)として一部では、知られている。

しかし、これらの著作は、研究者によって部分的には紹介されているが、ダイジェスト版であり、全文の報告はない^(1, 2, 3, 4, 5, 6)。それ故に、基礎文献として全文を翻刻することは重要であると考ええる。また写図をいれることで当時の講義がどのようなものであったか、またどのような文献や原書が用いられたかも知ることができよう。さらに、これら

によって当時の吉雄耕牛の医学的な知識がどれほどであったかを知ることができる。またそれを書き残した合田強の業績を顕彰する意義もあると考える。

凡例

- 一 この書は吉雄耕牛の講義録の五巻中の三巻『西洋医述』である。
- 一 今回、翻刻したのは香川大学医学部分館に所蔵されている本であり、これは、原本のコピーが製本されたものである。
- 一 本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻した。
- 一 本文中日本語の横に書かれているオランダ語の発音は本文のポイントより小さいポイントを用い、日本語の後ろに書いた。また説明の部分も同様にした。
- 一 著者の注は「」を用いて書いている。また長い解説は註として巻末に示した。

- 一 図は原文を元にして写図を作成した。
 一 解説不明な部分は■を用いて示した。

翻刻

西洋医述

紅毛医書「見え消し」 卷三

(本紙)

紅毛医談

四月十六日

夫始知薬能者自鳥獸知之

イ、ピスト云鳥 草木ヲロニ含自ノ肛門ニ

サシ入テ吾病ヲ癒セシヲ人之ヲ見テ肛門ノツキ薬ヲスルコト也

強「合田強」按由之觀之則白鷺入温泉治足痛 大鮪食葦將消鉄毒省入

艾於燕巢皆是也 痢ノ吐血ヲ治シタル人アリ デツケルト云モ明医ナリ

○パウル 内治上手也 外治次之 宝曆十二壬午年 留干長崎医也(註5)

●五千七百十一年 自紅毛開關至宝曆十二壬戌也

○洪水四千五十五年

○脉ハ上代ハ人迎氣ロツトル 中世ハ腕ノ尺沢ノ上ニテ診ス

今ハ寸口ニテ診ス

○病人ノ目ヲミルコト干「肝」要也 ○カンカルハ結毒旁ヲ云 瘰癧ノル

イ也 長崎薬師寺字衛門 此症也

○含薬上逆ヲ治スルモノナリ 焰硝ヲクリカンキリ 鹿角霜右三味ヲ用

ル也 ユル子セルヒユステン

○小便ヲミテ病ヲ知コト干「肝」要ナリ

○木舌ハ舌ガカツホ節ノ如ニナルモノ也 死症ナリ

○母死シテ子胎中ニ生テタルニハ腹ヲ切テ子ヲ助ル也 脇胎ノ小腹ヲタ

テニキルナリ 早速出也(註6)

腹ヲ十文字ニキリテ出スヘキ也 子ニ疵ツカサルヤウニスル為也

時ニ臨テ發明ニキルヘシ

○子宮ノ出ヲ小便ノ通セザルハ子宮ヲ切テ小便ヲ通スル也

母死セズシテ俄ニ卒倒スルモノハ其卒倒ノ中ニ急ニキルベシ 子出レ

バ子母共ニ助ルモノ也

○母死シテ子ノ生テタルヲ葬ルハ天下ノ不仁 是ニ卓ルモノアルベカラ

ズ 是ヲ切テ出スハ一人ヲ助ルコト也 ○母生テ子死タルハ始ハ玉子ナ

リ 子宮ニ入ズシテタル也 又陰門ニ腫アリテ子出コトナラズシテ死胎

トナルアリ

脇腹ニ白キ筋デル也 ソノ筋ヲヨケテ堅ニキル也 胞衣モソロソロ引出

ス也 胞衣ヲ出サレバ死スルナリ 血多クデルモノ也 子宮中ノモノハ

皆出ス也 子宮ハヌワヌカヨキ也自然ニ癒ルナリ 腹ハ金瘡ノ如縫タル

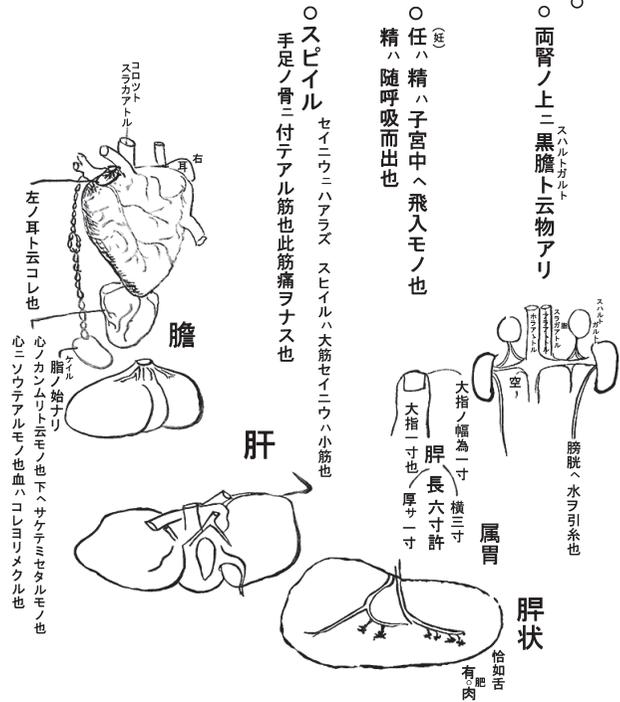
ヨシ也

大病ノ死人ハ解テ病元ヲシルコトナリ(註7)

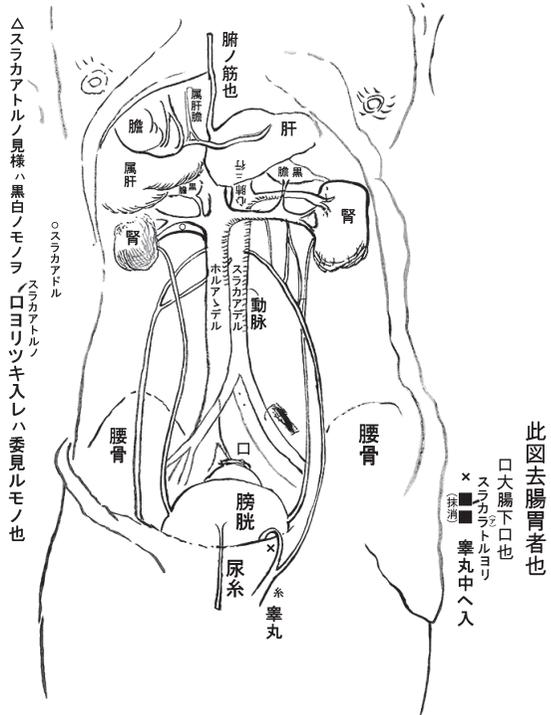
解寸両方ニセキヲ入テ皮ヲトキカケテタク 臟モ上手ノサト知ルベシ

△九月十一十二正二三月ノ間ニ解臟スルコト也

「病理解剖を誰が行ったかであるが、おそらく最初は阿蘭陀医師が行ったと思われる。消化器系などを、除いた図があるが、当時はこのように臓器を徐々にせずしていったという手法で解剖を行ったのであろう。著者らは当初はこれらの図は解剖書を写したと考えていたが、病理解剖時に直接写生した可能性もある。一か月に一回の割合で解剖が行われたこと、摘出した臓器ごとに書かれていることなどから、そのような可能性も否定できない。」



血ハ心肺ニ始ル 肺ノ筋ヨリ心ノ左管カラソレヨリスラカアドルニメグリ行也



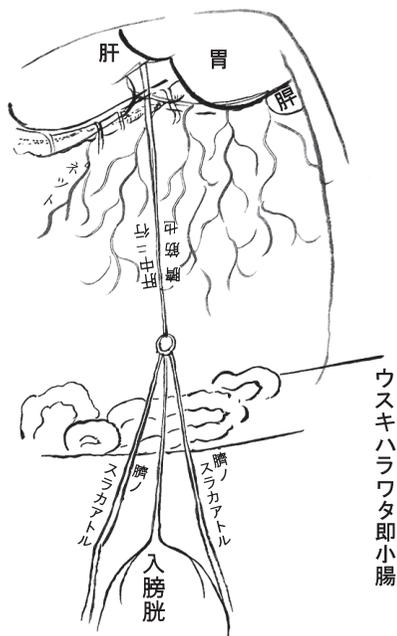
○心ノロニテ血ガ入ト心ノロニテシメルモノ也 其シメル拍子ニテ一身ノ脉モ動也

○心ノ左ノ管ヨリスラカアドルニ行テ夫ヨリ又右ニメグリ行テ心肺ニメグリ入テ又左ヘメグリ行也

○肺カラ心ニメグリ心カラスラカアドルニメグリ行ク也

○脂ケイルハ血ノ本也 是ヨリ血ハ生メクルナリ

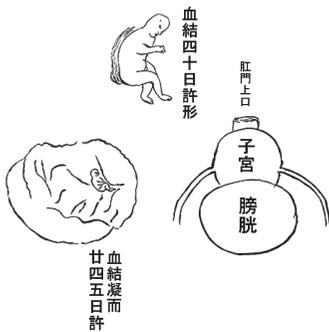
ケイルノ筋ノ本ハ胃也 胃ヨリ左右ノ腕ニ行 下ハ腸ニメクリマトウナリ



ホラアトルハスラカアトルヨリメクリヲウケテ一身ノ上下ヘメクラスモ
ノ也
臓府ヨリ心ニメクリテ スラカアトルヘ行テホラアトルヨリ臓府ニメク
リ行クモノ也



自始十月 月々解之觀之故知之



- 膽汁ハ常ニ腸中ニモ交リアルモノ也
- △犬ハ上ガ大腸下ガ小腸ナリ
- ▲腸ハ人ヲ横ニ伏サセテ尺ヲトルニ腸ノ長サハ六タケアルモノナリ
- 大クシテ短キヲ大腸トシ 長シテ細キヲ小腸トス
- △大腸ニ氣ヲ塞クト疝氣トナルヲ大便不通スル也
- ◎◎吐剂 以塩三勺入暖水漸々用之即催吐是吐方之随一也 有用焰硝者比塩湯則功緩也
- 閏月九日 治齒痛
- 柑青時穿之入胡椒一粒欲熱時採陰乾用之而為吐方
- 血ハ尺沢 陰器 足又肩ヨリモ血ヲトルコト也
- 血 無病ハ鹹濕ノアルモノ也 酸ハ故也
- コブノ治ハ板ノ上ニヲキコブシヲ以テキビシク打トヒシゲルモノナリ 是上策ナリ コリタルモノノナル故也
- 次ハヨクモムトキハ散ナリ
- 梅毒ニハ水銀カ主薬ナリ 俗ニ云鳩腫ト云類也 又ナマリヲ上ニヲキテモ治スルナリ ネカマリヲ上ニキヲキ「見せ消し」ナマリ板ニ水銀ヲスリコミノソレヲ付マキヲクナリ
- 産ハ難産ノトキニハ手ニハサミヲ入テ子宮中ヘ入テ手足ヲツタツタニ切取テ産スルコト也
- 上ソツヒルマアトハ水銀ヲ丹管下ヘレシイタア
- 靡ハ始ハムシ薬ニテ腫上ヲヒタト温メル也熱薬ニテ引上ルナリ 口開クトエチヒシヤコンノ類ニテ腐肉ヲトルコト也 ヒタトカヤウニスレバ

次第二毒氣ハヘル也

○目ノ赤ニハヒドコノ下ノ土ノカタマリテ石ニナリタルヲ使也 水砂糖

天水ナドヲ使也 ○ウナジヲ切破テ膿ヲモタスモノ也

針三稜針也 二糸ヲ通シテ中ニ通シテ膿ヲモタス也 仰テキルナリ 惣シテ

頸頰目上部ノ病ヲ治ス○

天水十匁 水砂糖少 右カキ交テ目ヲ洗也

ソコヒハ項ヲ膿スコト也

○鼓膜ハ尼ヲ以テ治スル也 ヒヨヘラス方

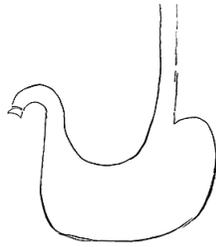
石薬ナリ 焼テサメンクキ堅キヲ上品トス

ランジャク ヲランダ

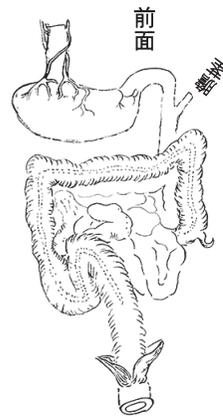
之ヲ粉ニシテ水ニテモ湯ニテ用

○産前後ノコト一卷ノ書アリ

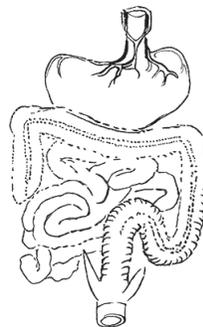
○子宮中ハ水ナリ胎ハ水中ニ「病理解剖を見た感想か？」



胃ヨリ小腸ニ至リ小腸ヨリ大腸ニ入 病小腸ニアルトキハ下利シ大腸ニアルトキハ秘結ス



胃ハ厚キモノ故虚スルト云ハ誤々



閏月十七日

△小兒半年ヨリ二年頭ニ拳計ノコブノ如キモノ生ス 腰以下腫氣急 足

勿手筋而曲不能立

是督脉通り弱而為此病テレイキノ如クナラフカト 故用後方はハヤリ病

ナリ

タマリンデ 四匁 ホリリヤセイネン葉也 二匁

下スモノナリ 和無 ラバブル五分

右以水煎 掛目二十四匁 マナ八匁 茨ノ花ト糖蜜トヲネリタル也

ロフザ蜜 八匁

右下シ薬ナリ

閏月十七日聞 一 卒倒 ハルレンデイキ

▲上部塞リ気血順還スル中ニ上部ニテ塞ルトキハ卒倒スル也 或ハ驚テ

倒スルアリ 怒テ倒スルアリ 安堵シテ倒スルアリ 酒ニ酔テ倒アリ
炎天ニ中リテ卒倒ス 血充滿シテ倒アリ

疝氣 虫ボルム或ハ子宮病ニテ倒スルアリ
毒ニ中リ経水不通 痘疹ニモ倒アリ

治術ハ髪ヲ牽呼返シ按摩シ ルウダヲモンデ鼻ニ入クツサメ為 嘔開
勺葉燒阿魏入鼻或用吐葉メルクウリスヒイタ タルタアリイ
後以輕粉劑下シ

シイナヤラツバア ゴムギウタ雌黃 シヤモウ子ム デヤカレイデ 其中驚為
此病者不及葉等也

虫ニハ ヲトキリ草 蘆云、硫黄 輕粉メルクウリスドリシス 下シ葉也

カルデベ子デキシ 鹿角散 朱砂

湿 勺葉 一角 アンテモウニイ 中毒 卒倒オンチキウキイ 「見せ消し」

山羊牛等ノ乳汁ヲ用シハ嗜レハ愈「瘡」 乳ヲ用テ後ニ背ヲタトク也
「見せ消し」

コ痘疹卒倒 背ヲタトキ発汗シテアブル 朱也 サスル也 アンテモウニイ

吐法ハアシキナリ ウニカウル

タランギラアタ 土類ナリ

アンテモウニイデヤホレデコム 鹿茸

痘余毒糜爛 シキウルボイク 凡余毒爛ニハ 勺葉走子疳ニモヨシ 子■ナリ

犀角

痘ノシキウルホイクヲ治 毒甚トキハ中ヲ清スル薬カヨキナリ
方

肉豆蔻シントタルバ カルデベ子デキス シコマフル四 白琥珀末 ユ
ンゲルアルシス

角シコロフル一
ヒシイケルシイ各シコロフル二半 マルガリツテ一匁 角石五分 一

カランヒユマン三匁 勺葉仁一匁五分 サガルカナアリサス十六匁 ホ
ルアウル散三

右散十三味五分ヨリシコロフル四迄

△ベレシフテアト云也下ヘヲシ付ルコトヲ云也 此薬下ヘ引下ケル薬也 上
部ノ結毒ヲ治スルモノ也

焰硝二匁 角石二匁 ヲクリカンキリ二分
為細末以茶用五分 一日三度

閏月十一日 瘰癧 カンカル
始ハ結核アルソレヲ筋カ絡テアル也 カンカルト云ハエビノ足ノ如ニ

絡テアル故ニカンカルト云也 色モ海老ノ色ニ似テアル
青灰色ニナルモノ也 丸フカタマリテポクポクトツキ出アル也 後ハ青

黒フナル也 カンカルハスルトナル病ナリ 上ハ乳岩ノ如クナル也 ハ
サミニテ切テ丹膏ヒツトルヨルエケヒシヤン 類ヲ■ユル也

○今一種カンカルト云病アリ 少違也 乳岩モ同症ナリ 上部ヘ上ル氣
ガ項ニアツマルヲカンカルト云 乳ニアツマルヲ乳巖ト云 首ニモアキ

トニモ出キル也 血分ツヨク火氣ツヨキ者 血氣カニエテ如此症ヲナス也
膽カアフレテ黒クナリテ血脈中ヘアフレテ此病ヲナス 癩症モ此膽スハル

トガルトカラ起コルナリ 狂モ是ヨリ又発スルモノ也

病元ハ膽カ黒ク焦ルト血ガコクナリテ熱ヲ生ジテ此病ヲナス也 此病ハ多ハ膽ニカゝルモノナリ

膽カコゲルト膽汁ガ一身ニアフレテ筋アアドルノ中へ入テ一身中ニテ癩如キ病ヲナス也 マタ一種膽汁カア、ドルノ先ニ行ツクトバツト熱ガ起テ病ヲナスアリ 是難治ノ症ナリ 此腫物ハ潤少クシテ乾テアルナリ

病症ハ寒トミヘテ底ハ熱ナリ 膿ノ出ルハ少ハヨシ 乾ハアシ、

○母ノ胎中ニ有テ ○膽カ肥大ニナリテナスモアリ段々替也

ドモ其類皆一也 膽ノコゲテ為病ト治方ハ一ナリ

○血味ガ酸テ辛アリ

又酸シテ鹹ハ内ノ熱ナリ血酸ハ如作醒中チ毒發故也 又辛シテ渋イアリ 此

病ハ甚シキ也

○渋キ味ノアルハ病ノ勢ノツヨキ也 ●病ヲ始テ治シテ其根カ残テ後ハ却テ甚クナル也 一度誤治シテ後ハ増症ト成テ難治トナル也

○湿ノシメリタル病ノ本ハ食物ヨリ起ル也 又一ツハ鬱憤ヨリ起ルナリ

熱所ニ居リ寒居ニナル カハルカハルナルト此病ガヲコル也 病ノ本ハ

第一ハ鬱憤ヨリ発ル也 痔カカンカルカ婦人ハ經水不通カニナルナリ

食物ハ忍肉ヒトモシノ酔氣乾肉ナトヨリモ起ルナリ 必食ヲ慎ナリ 重

ハカンカルニナリ軽ハ痔トナル也 第一ハ鬱憤ヨリ起ルモノ也 此病大

病ナレドモ治ヤスキアリ 又輕クミヘテ有不治 是ハ医ノ上手下手ニヨ

ル也 昔ガレイ子スト云人ノ時迄ハ不吟味ナリシ也 其後誤テ後覺タナ

リ痛カ殊ニツヨキモノ也

今ハ詳也 ○始青シテ後ハ土色ヨリ紫色ニ筋カ絡高ヒクニナルモノナリ

胸ニモ舌ニモ陰門ニモカンカルハ出来ルナリ マタ木ノフシノ如ク腫ア

リ 是ハカンカルニアラズ カンカルハ始終疼痛甚シキモノ也 不痛ハ

カンカルニアラズ 外ノ腫物ニテモ痛ガ出キルトカンカルニ変スルモノ也

腫物ノ中ヨリ黄汁ガ出テル也 ○カンカルハ大病ナリ 此病中ニ隠テ

アル症ハ死不治也 不可治也 外ニ有病サへ不能治 何内ノ病ヲ可治哉

医ノ悪声ヲトルハ死生力不分故也 死症トミタラハ退辞スヘシ 強テ頼

マバ上ヲ撫ル如キ治ヲナスヘシ 強テ不為治也

治法 此カンカルト知ハ内治ハ只牀中ニ邪ヲ 不可置 第一尺沢ヲ取血

婦人ハ經水ヲ可下 腹中不可塞 常ニ道ヲアケテヲクヘシ 腸胃中ヲ可

洗也 第一外へ発スヘシ 表発即馬手繩ヲ持タル如ク動カスヘカラス

知此病則不可驚也 如石腫故医驚也 如行大通之正中可治也 易乾故可

潤也 医亦如此病不治則不可曰 医故医可慎為也 難為膿故 以為膿為

治法 以膏可為柔也 此治誤テ燒カ子灸刀ニテ切ルコトハアシキ也 柔

ルニモ柔ナル法アリ 心静ニ可治 ○隠レタルカンカルハ根ヲキルベカ

ラズ ○當為発散 ○四十才計ノ女カンカル右ノ乳ニ出来シナリ 又一

人女左ノ米カミニ出タリ 十五年計生タル也 之ニ用シ方 ロウザノ油

之ニ 十六匁 白蠟六匁 ナマリノマキカエシ四匁

右三味ヲ付タナリ

又方 ナマリ 水銀 右二味焼貼之

種痘(註)

トルココクヨリ

エシツト国ヨリ始 始ハ難 後人信紅毛イキリス是ヲナス 罪人ヲ以試

タリ 今 善痘ノ膿ヲトリ手足ニ鍼ニテ少 疵付テソコヘ膿ヲ付テ上ニ

フツシメイチャヤ上ニヲキ卷キテヲク也 ○風寒熱ナトモナキ時常常ナ

ルトキニ 為之

◎△口中 言語不正者舌下ノ筋ヲ切テアトニ枯攀ヲ付ヘシ



△大腸ヲ疝氣ノ腸ヲタト云 大腸中ニ風氣ガタマルト此疝ヲナス故也
腸中ニ鬱シテ熱生スルト氣力塞ル也

取血

○自陰莖取血法人ノ筋ヲ考ルハ此血ヲトル為ニ人ヲ解キテミルコトナリ 不仁ノサタニアラズ

下焦熱甚者必取血 陰莖ノ上ノ本ニ大筋アリ

疝ニナルヘキカト血ヲトルナリ 真中ノ大筋ヲ切テ血ヲトル外ニ筋ヲ切ヘカ
ラス鍼ヲタテニスベシ

大筋ハ上ニ上テ見ヘテアル也 痛甚ハ筋力張大ニ成テアル余ノ血ヲト
ル如クランセツトヲ以テ切テトル也 血ヲトルト莖ハナユルモノ也 サ
スレハ血ハ止也 ヲシモメンヲロニツカサ子テヲク 卷モメンニテ緩ニ
卷ヲク也 卷コト強キハ痛出シ強キハ血ノ通モアシキ也

○針モアサク長キハヨシ 深クサスベカラス

○舌ノカイル筋キ、ホアスア、ドトル也 蛙筋也 ヨリ血ヲトル 項ノドノ痛ミ

舌痛血ヲトルト痛去也 腕足ト トルコトモアレドモ多此所ニテトルガ
ヨキ也 舌下筋出シヤウ 首ヲモメンニテシメルト舌下ノ筋ガ出ル也
舌ヲ引出シテ左ノ手ニテ持テ右ノ手ニ鍼ヲ持テ舌下ノ筋大ニフクレ張テ

アル筋ニテトル也穴ヲ細ニアクレハ血カ尺ノ如ク出ル 多ク血ヲ取ント
欲セハ穴ヲ大ニ開クヘキ也 血ガトマルコト自然ニ止 卷モメンヲトレ
バ血ハトマル也

醋ヲ口中ニ含ストキハ血ハ止 又明攀アロシニス黄ヲ付ケルモヨシ 上ニシ
キ モメンヲスル 或ハ石ノワタモヨシ

△自尺沢取血法 昔以此法損人多 今詳故無損人 手段未熟故也

欲取血則 毛綿一寸四方納血器 白湯器此洗血器

醉少モ辛倒セハコレヲカ、スレハ氣開也 侍手二人夜分ハ三人

血ヲトル中ニ胸中ノムクムクスルコトアリ 不可懼氣將開故也

氣絶亦不可懼也 不可拘于左右多則自左腕可取之手中可取血筋有

ホヲフトア、ゲル カシラト云フコト筋ノコト

一 レイフルア、ドル 肝ト云コト 右ノ手也

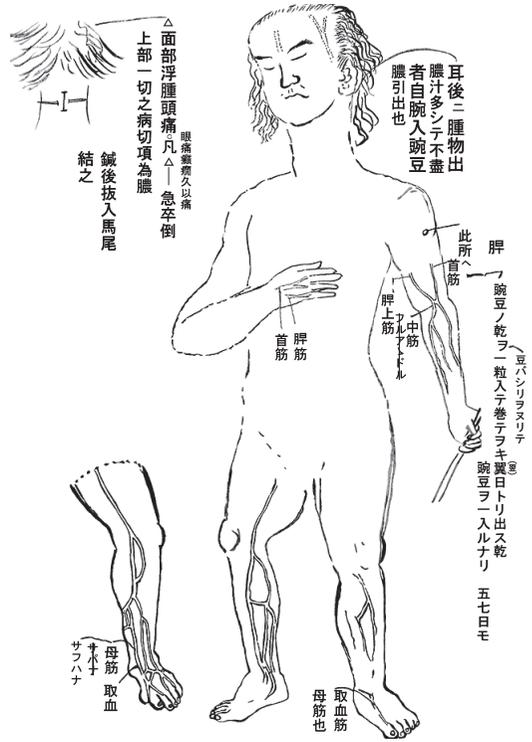
二 ミルトア、ドル 脾ノ臓ノコト 左ニアリ

肝脾デナケレバ血ハ出ヌ也

首筋ハ腕ノ外ソト表ニアリ 首筋ヨリモ血ヲトル

首筋ヨリ血ヲトル





△自足取血法 婦人経水不通者取血凡上部之病 取 足血
廿三日

△頭病者ヒタイ肩間刺血眼痛取于眼下鼻本

ハルシヤ「波斯」ノ国ハ人足ヒツカ、シノ表腫 其トキハ膝眼ノ真中ニテ切テ虫ヲ出ス 竹ヲ以テ巻トキハ五七尺モ出ル也 其後ハ治スル

○自水落腸痛医用水銀二匁百歩後自肛門水銀出治

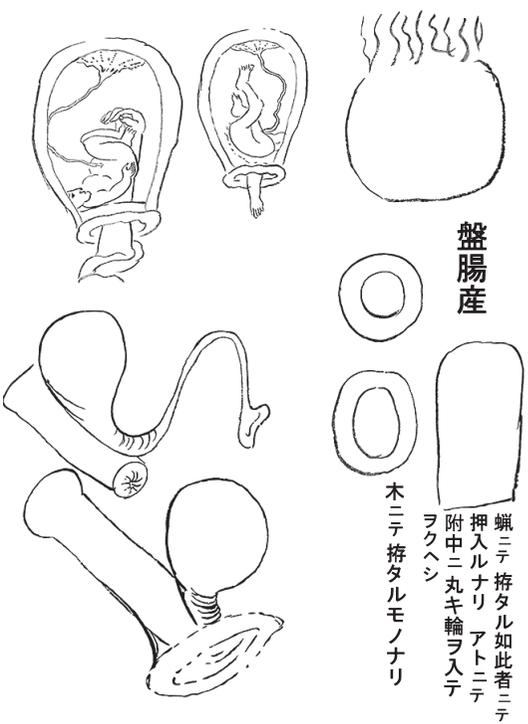


○タバコニテ痔ヲ蒸ルコトナリ

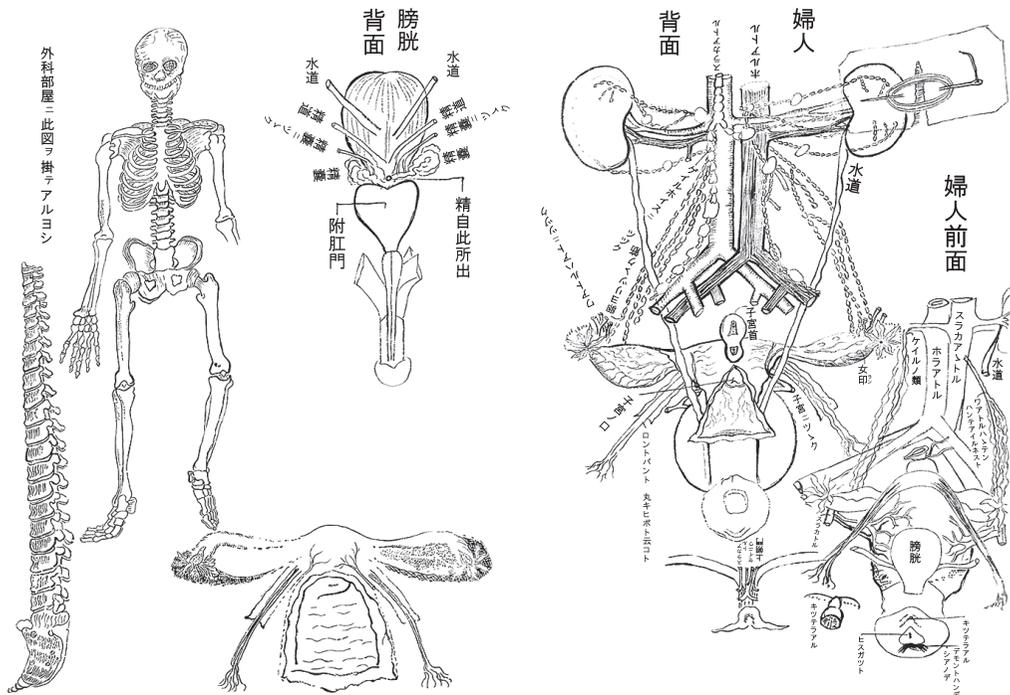
○下小兒之虫 小兒ノ臍ニ獸膽ヲ入上ニ紙ヲ張テヲケハ虫カ大便ニ下ルモノナリ

○指ニ瘰癧出テ死ニ至ル者ハ始ニワリテ焼酒ニテリア、カラヲ入テ中ニ一筋ノ黒血アルヲ洗去テ又アトニテリア、カラホツシメイチャニ付テ上ヲ巻ラクヘシ

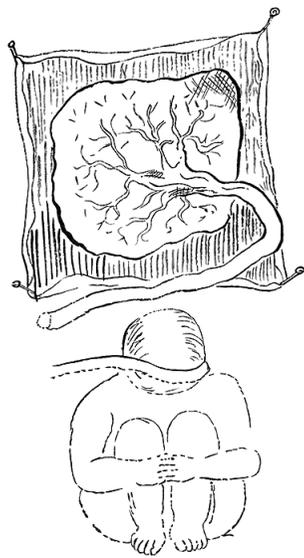
○靡ハ始ハ表散シ後ハ発汗下薬也



「盤腸産は子宮脱でペッサリーを用いてこれを防ぐ方法を示している。また難産時の補助を示している。これらは産科の教科書を基にしたと考えられる。」



- 鬱金 赤毛 メリクウリユスドルシス 梅毒 治瘡ヒゼン 小兒虫惑常ノ下ニモ用ユ ケレイン六ヨリ五分迄
- 雌黄 キユタガンバ項ヨリ足心迄不残下水気也 又治水腫脹滿或小瘡之発ケレイン五 シコルフル半 又ハシコロフル一ツ迄
- 千ナリ瓢箪 開キ小便ヲ利 大熱ヲ消ス 胸中ノ病ニ用
- 蝮蛇ヲ切テ煮テ麦一握ヲ入テ一所ニ煮テ麦熟スルヲ度トス 麦ヲ乾テ雌鶏ノ若鳥成ニ食セテ其鶏ノ毛モ抜ケルナリ 其后又生スルトキ殺テ水煮ニシテ結毒ノ人ニ肉水トモニ食サスレハ甚ヨキ也 ヨク出テ癩ニ似タル結
- 甘遂 シツヒリンフロイト 大戦ノ内高一二尺実ハ三角也 丸キ実中ニ三ツアリ 茎指ノ大 茎中空ナリ
- 細長キ葉向合テアメントウノ葉ノキヤウチクトウノ如ク葉面肖ナリ 上ニ小キ花カ出ル 三角ノ実カナル 根ハ葉ニナラス 葉ト実計使ナリ



- 実甚下スモノナリ 吐ヲモナス 下第一ナリ 六七粒ノメバ甚下ル也
 葉ヲスリテ手ニ付 レハ水フクレニナリ 斑猫カンタサイテスノ替リニスル
 折レハ白汁出ル 此白汁ヲ疣ニ付レハ疣ハ消ルナリ
 ○下方中ノエジュラ カタヒヨチハ此能ニ同シ
 ○船ムシ
 ○斑猫カンタアライデス 蚊蟻 入焼酒 一夕飲服通小便 ○外治ニ用ルトキハ
 一身中ノ水ヲ取ルトキハ十疋計摺テ肉上ニヲケバ翌日腐爛シテ水出ル
 ○眼痛或上熱或頭痛ヲ治スルニ
 ○犀角リノセルスノウセス能ヨリ一角ウニコルニス
 リノセルス ウニハ一ト云ウコト カルニスハ角トイウコト
 ○珊瑚樹コアラ 白アルビ 赤リブリイ 為末 治熱病
 ○石ノ綿 ボヒスト 石上ニ出ル 色ハ紫ナリ 此氣目ニ入ルト盲トナル
 何薬モ不治也 可慎
 ○血ヲ止ル能ハカリ也
 ○明礬アロミノヲサ大如梧子大領服治吐血
 ○硫黄シユルfris 熱病時疫 開胸痛発汗甚有益薬也
 ○鳩ノ生ナルヲ切テ切口ヲ足ノウラニ付ケルト癩癩ヲ治スル也
 ○又人ノホヤケノアルモノニハ生鳩ヲ切テツケルト治スルナリ
 百十
 ○松菜ウエツテ カアリス 死胎ヲ下 墜胎
 常不用稀用下腹中之水 食之治水病脹滿性猛也 乾燒吸烟則蛇類皆去
 ○車前フランタアゴス 葉 治一切下血吐血
 ○二氣丹サアリスアル子ルヲ 解熱止瀉 開府鬱去腸胃之穢物 殺蟲一匁迄用
 ○奇南香并沈香 用内治開氣

- 龍涎香アンベル クジラノ白糞 能産前後ニ用 血ヲ治
 ○内治ニ用ユ 一匁を嚙テ一日ニシテ又一匁アルモノ真物ナリ
 ○是ハ山ニモアリ 海ニモアル也 琉球ヨリモ来ル
 ○阿片ヲ、ヒヨム 治諸病 寒国ニ多不用熱国之人多用 治諸病 大熱治
 治吐黄汁 治赤痢 毒盡久不止
 實ヨリ
 ○莖葉 擣臼煎汁去滓天日ニ乾燥ス
 ○大黃シカトカアムルニ出 青黄ヲ上トス 軽重ナキヲ上トス 能中ノ惡汁ヲ
 緩ニ下ス 用痢炒用止下利 大黃膏能為良
 ○大黃ラマアルブル
 表△咽腫用之凡肺中病主之又狂症又腹中一切腫物皆用之
 又腫物熱毒甚 必用之 又肝膽有病不和則用 ○中有毒必用下 則臟府
 皆和 ○長生湯 大黃為主用之 人必長生故名 用自一匁至二匁
 浸酒水至三匁一切有熱者必用也 冷内者也
 ●近年支那医灸用甚凶怒 則以炭與人同若用之則下者止下利 必凶故婦
 人帶下下血為霜 用之必治 無拘惟炒黃可用 一切下血必用 炒黃甚吉
 方中加墻物用之羸者 小兒産後斟酌而之 ○炒黃為下藥不可用也
 ○生大黃絞汁入鍋為膏臨
 四月七日 一日濕ニシテ燥スト云
 裏○大黃味嗜性冷下利柔腹中アガリイキスノ能ト同也下ノ方中ニアリ分景
 「量カ」アヤリユスノ通ニ用ユ 胃中不歡者少用粉不及煎用也 自高墜
 時用ニ大黃匁ミイラ少 外治ニハ油ニ出シテ筋起キ痛ニ用 手ノフミ違
 打撲ニル也○フランス国ノ王ガ人ノ黄ヲジラス中ニ黄計ヲ用テ我痛ヲ

不断治タルト也 五臟ヲ達ニスルハ黄也 中ヲ順通ニスル者ハ黄ナリ 常ニ散シテ用ユヘキ也 下利ヲ止ルニハ炒テ用ユ敵ヲ止ルニハ霜ニシテ用 又婦人ノ帯下ニ黄ヲ用レハ大ニ利アリ 小兒ノ虫ヲ殺 生大黄ヲ上トス 効殊ナリ 乾テホクホクスルハ悪シ

○仙遺糧ラアテキスシイナ 治手足節々之痛 燥麻凡湿痛不可用 シンキン キニ不可用

治黄疸 治水腫 治痿症非セイニウ筋痛 治膀胱之病 燥湿治下血 或久頭痛

○※使十六錢目以水五合煎取ニ合半○始ニ汗ヲスルヨキ也 梅毒用使 間々合服鷄汁

△鷄ノ脇腹ヲサキ腎ヲキル 瘰疬後肥ルコト甚シ○人ハ陰囊ヲキル キレハ器不起

○鷄フウンドル ガリンヤ 鷄汁カルデ方 若鷄一羽毛ヲ去臟腑ヲ去 頭足翅ハ シヲ去 豆ニ載セニツニツニ開キ瘀血ヲ包丁ヲ以テ骨肉共ニタ、キ水ニ 升ヲ以テ煮テ一升五合ニシテ 木綿ニテ汁ヲ漉 滓ト油ヲ去其汁ヲ病人 ニ用ユ 凡一切ノ瘡久不愈ニ用ユ 氣血ヲ増シ瘡ヲ癒ス 輕粉丸ヲ用ル 間ニ鷄汁ヲ用ル也

○没藥メラ 合 大麦汁飯ノトリ湯 治淋病

殺虫 開子宮之塞 治久咳 治喘 治大腸胃膀胱之病

○蘆薈アロエ 内治下スモノ也 去腸胃垢也 洗藥 外治

○乳香アリバアスム 止血故治吐血 用金瘡ツケ薬

○ミイラ 木乃已

人ノ死ニタルトキ棺ニイレルトキニ人ノ腹ヲワリテ 臟腑ヲ去リ色々ノ脂ヲ入テツメテ白モメンニテ卷

ソレヨリ棺ニ入ル 葬シ數十年ノ後出シテコレヲ用ユ 又一説 蛮 國沙海アリ其トキニ其中ヲ行人 風起リテ沙中ニ埋テ死スル人後 ノ人堀出シテ之ヲ用ユトナリ

ヘレボウリレス ニスコロイト 大和ノ國云 蝮コロシト云 吐藥ニ用ユ

○紅毛北方也 寒國也 来抱日東

○朝種子暮熟 是今之北極也 崑崙金輪山「見せ消し」即須弥山也

○紅毛國無閏月 平均為歲 譬二月二八日 又有三十一日 又三十日之 月曆ヲ改ルニハ アラビア ハルシヤナドニテ改ル也 雨フラス國ナリ

此國ニニイロト云河アリ 此水五穀ヲ潤シテ長生無類也 此國天地中ノ

上國ニシテ生スルホドノ物無類ニ長茂ス 人モ子ヲ三五人妊ム也 鳥獸

草木無類ナリ

茨ロウスノ木三四尺廻アリ 此水ノ落ル川ハ匂イアリテ無類也 羊四角 六

角モアリアルモ同之 男女之面美麗也 且 玉珠ヲ飾ル故ニ日中ニハ目モ

アテラレヌ計也 釈迦モ此ハルシヤ國迄行シ也 釈氏ノ云

極楽浄土ト云是國ノコトナルヘシ 釈迦ハクロフボウノ國ノ人ナリ故ニ

三月五日 聞之 レイウカ語也 自吉雄先生傳之

□時疫 口中渴唇皸 舌燥 以解熱為上策其熱和則 自尺沢 取血后

以大黄下之 遲則難治 可畏之病也

○◎中風 難治之症也 以温泉為上策 葉湯次之

○帶下 難治之病也

○隔啞者ヲシコロシヨシノ胸ニ脹ハ吐止 與婦人之懷妊同中有物故當下之

解熱方 大麦煎汁大能下利也 橙柚枳之類ノ酔中 砂糖少 大熱者漸々用之則解熱

此后四五日而自尺沢取血又下亦可也 緩下為可

◎○汗吐下ノ三也 和則下法也 曰和者誤リ也

治術若無大黃焰硝則無可治之藥也

常語曰

○医ハ金石ノ如ク心ヲ持スヘシ 若柔和ナル者ハ腫物ヲ膿スモノ也 是ヲ常ノ戒トス 額ニカケテ貴フ 病古キナルトキハ治シカタキモノナレハ也

○小兒遺尿 龍牙藥仁タイコンソウノタネ ケレイン一 沒藥

△○小兒ノ時斬陰囊 則其人肥大異常 至老其声如児声 故遊戯之徒為

歌児

○セイニウハ心ヨリ分レ出ル也 セイニウハスラカアトルニモ行也

○スラカアトルハ肺ヨリ分ル

△通藥

スミレノ実 ホウズキ実 芹 船虫フナマメ 散トシテ用 右四味 通小

利 利水

琥珀 散服

△下藥 多ハ丸散ニシテ用 不煎服 シュヒスタント云ハ一味ト云コト

インヒコスト云ハ加味ト云コト

有山上

マナ 八匁 三十二匁迄 カシヤビルマ 十二分 十六匁

板野 俊文、田中 健二——合田強の『西洋医述 卷三』の解題と翻刻

ボレボデヨム 十二分 十六匁

エピテイメム 四匁 インヒユス加味スルコト也 八匁 タマリンドペル

パ 八匁

右輕刻也

○ラバルブル 一味ト云コト シュヒスタント 大黃 一匁 一匁五歩 大黃膏 ケ

レイン十五ヨリ シコロフル 一 メゴア、カナ 一匁

蘆会 一味 一匁 蘆会ヲ藥方中ニ入レハケレインナ云

蘆会上 アロエロザアト 細末シテ白イバラ花ツイテ汁ヲトリ 此中ニ入 日

ニ乾テ用

又 花ノ汁中ニ入テツク 日乾又三四編スル也

此能胃中ヲ調 虫を殺輕下為丸ニシコロフル一五歩迄用

重下藥

セイニヤノ藥 為散 五歩 一匁五歩和ナシ シカモウネムレシイナ ケ

レイン十六

デヤハレヘデム ケレイン十 雌黄コムギユウタガンバ 即黄土ナリ 画ノ具

ニ用ユ 五歩迄

ヘレボウリ アルビイニ同ナリ ニゲリイ 四分

輕粉 シコロフル 一グラム 五歩迄

タヅノ木ノ内青皮利水ノ物 四匁迄

甚下藥

シユクスイレラスノストル フロヲル 此汁ヲンボリテ其汁ヲ用 水腫ヲヨク下ス也 未

詳 汁ト云コト 名 シヤガノ類ナリ 玄雄リウキウシヤガト云

クウレル 八匁ヨリ二十四匁迄

ヘレボウルアルビイ脾ノ鬱ヲ下ス 狂癩症ヲ下ス 頭鳴或水腫如キモノ 野キウリヲ代テ使

中ニヘバリ付テ腹痛アルヲ下ス 稀ニ用ユ 五分ヨリ一グラムマデ

コロシンテス木ノ実也 ケレイン六 十五迄

エラテリヨム ノキウリノ汁ノコト コロシンテスト同シコト

アガレスタ汁シホリタルコト ケレイン五ヨリ十迄

カタ能同大戟ビヨテカタヘテヤ同シコト也 ケレイン 六 十二迄

エジュラ 能同カタヒヨテニ 土民常之ヲ用テ下ス 草形似大戟沢漆統隨子 ケレイン五ヨ

リ十迄

エツキスタラク トエツキスタラクト、云ハ物ヲ合セタルコト也 エジュラ用レハ腹中上下雜ル

モノナリ 折レバ白汁出ル 其白汁ヲ使フ也 シコロフル半五歩迄

大黃 六味ハ大便下惡臍

蘆会 マナ 草ノ細キ白タネ也 ケシン如キモノナリ 寄木ナラン未詳 和無カシヤビル

パ 和無 カシヤハ木ノ皮也 如肉桂 能下

メガア、カナ 和無 シカモウ子 和無

又利悪水「見せ消し」下黒臍 小臍ノコト

エビテイミム ポレイボウデヨム

ホヲリカセイナア ラアテキスヘレボウリイ ニゲリイ

又ナメ下シ腸垢ナリ

輕粉似タリ メルクウリスドルシス アガリイクス テルピヘテム

コロシンテス野キウリ

△下悪水

ヤラツパア 無和 ペルパタマリントル アウサムヒユルミナンス

ゴムギユタ 雌黄ナリ シユリスイレラスノスタラアト

コルデキスメデイスサンブシイ タツノ木ノ枝ノ青皮

閏月十六日

○廿五才女十月経閉欲嘔吐不吐 色青左脇腹痛 骨折彎牽

欲気絶 丸薬 三度下利忽治

丸方

マサヒルラ合スルコト 丸スルコトアロエ蘆会パンギン

マヨラアナ水蘆会トマヨラアナアト合スコト也 シコロブル 一

サルシクシニイ琥珀ノ塩 サル塩アルモノニアカ 各ケレイン四

レシイナヤラツパ下シ薬 和無 ケレイン六

ヲ、リヨム油ト云コト マヨラアナ 見合

右五味末為丸用 六丸

○マヨウアナノ能 実葉ヲ用 頭中之悪物ヲ去リアトヲ冷スル物ナリ

テイニウ

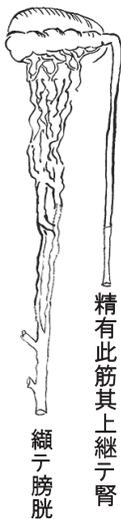
胃中 子宮ノ閉タルヲ下ヘヲシ下ケルモノ也 頭鳴 疝気 経閉 耳鳴

取此油用則安産

○サルアルモウニヤ能 開クモノ也 熱アルニ疲咳テイレキ 胸中病 スル

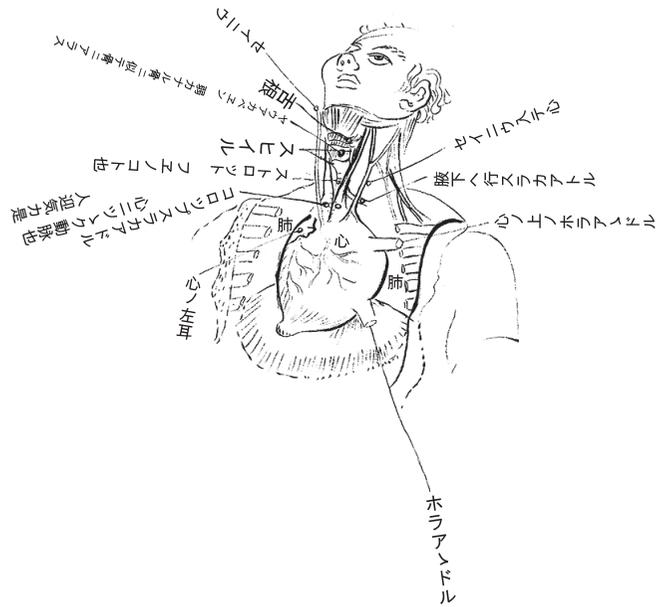
ニ用 腸胃之穢物

発汗



精有此筋其上繼テ腎

縊テ膀胱



- 油ノ中ニ水ノアルハコヨリヲ水ニツケテ油ノ中ニ入レハ 水ハコヨリヲ傳フテトレルモノナリ
- キ、ホルスカイル ○ア、ドル筋也 ○
- 入温泉ス飲之為良
- イルホウロニハ外科ノ上手也 新書ニ序ヲ撰
- 紅毛人八十九歳迄生ルモノ也
- 馬力癩 ○カンカル カンカルハエビガ子ノコト也

まとめと考察

- 一 産科における基本的な考え方や方法論を述べている。また後に帝王切開術に発展するような記述や、ペッサリーの使用法を述べている。
- 二 病理解剖の必要性を述べ、実際、宝暦十一年九月から十二年四月まで一か月に一回解剖が行われたことを述べている。また写生を行って各臓器の形態を示している。
- 三 取血法について、具体的に血管等を示し例示を行っている。また取血法の適応症例について述べている。
- 四 卒倒について病状と治療法について述べている。
- 五 癌について、一部の記載は瘰癧との混同があるが、記述している。
- 五 種痘について、人痘法について当時の現状を述べている。
- 六 汗、吐、下に関する各種の薬物について述べている。

吉雄耕牛と蘆風の講義が当時の受講者を驚かしたことは、本巻を見て、十分に理解できる。グーグル翻訳で日本語からオランダ語へ訳すと、多くの語は正しく伝わっていることがわかる。無論、いくつかの部分で明らかな誤りもあるし、また誤解や、誤訳があることも否定しないが、当時の日本における最新の医学知識がここにあったのも事実である。

吉雄耕牛がどのような許可を取ったのかは不明であるが当時の病理解剖が頻回に行われたことも驚きに値する。当時の日本における解体図を見れば、罪人しか解剖していないことから、首がついている図は新鮮である。おそらく当時日本にきていた若い阿蘭陀人が死亡したのを解剖したのであろう。また脳の解剖図がないのはなぜであろうか。疑問がわい

てくるが、今の段階では不明である。

第四巻では菓草が出てきてやはり写生されている。しかし解剖図が出てくるのは三巻が中心である。

また当時の世界事情などが講義の途中で挟まれているが、後藤梨春が『紅毛談』にアベセを乗せただけで発禁になった当時(一七六五)の状況を考えると、これも驚きである。情報が極端にふせられて門外不出、一子相伝と伝えられたことも理解できる。

吉雄耕牛、合田強の努力と、それを伝えた合田家の末裔の方々に感謝する。

参考文献

- 1 富士川游『温恭合田求吾先生』 中外医事新報 一二三九号 一〜九ページ 一九三六年(昭和十一年)
- 2 大久保甚一『讃岐の名医合田強先生と最初の蘭方内科書『紅毛医言』』東北帝大 長陵 三十五号 一九三六年(昭和十一年)
- 3 酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍 昭和五十七年 二六五〜二七〇ページ
- 4 長与健夫『合田求吾の『紅毛医言』について』日本医史学雑誌 三十八巻三 号 八十九〜一〇〇頁 一九九二(平成四)
- 5 胡光『紅毛医術の伝播と長崎——合田求吾・大介兄弟の足跡を通して——』二六〜四十八頁 中村實編『開国と近代化』吉川弘文館 発行 一九九七年
- 6 板野俊文、田中健二『合田強の紅毛医言の現代語訳』医譚通巻一一九号 一〇二〜一二三頁 印刷中 二〇一五年(平成二七)

(註1) 合田強の略歴

富士川游はその著書『温恭合田求吾先生』(参考文献1)の中で以下のように述べている。

合田求吾先生は讃岐国豊田郡和田浜(現香川県観音寺市)に、享保八年十一月合田吉盤の第一子として生まれた。諱は強、字は千之、通称求吾、姓は合田氏、

巨鼈、鼈山、又崑陵山人、皆備堂とも号した。

父祖の業を承けて医術に志し、同郡の合田又玄、高橋柳哲について、医学を修め、弱冠にしてその業を受け継いだ。しかし歳をとるにたがって術の施し難く、学の疑いが多いことを知り、暗然として、未だ術が足らず、識未だ開くことを得ず、良師について学ばざるべからずと、憤然として郷里を去って、京都に出て研学へと志を立てられた。時に宝暦二年の二月、先生の齡二十九歳の頃であった。京都では松原一閑斎に医〔古医方〕と儒学を学んだ。さらに宝暦六年江戸にて讃岐出身の望月三英につき、勉学に励んだ。

その後、宝暦十二年一月から、長崎で吉雄耕牛・吉雄蘆風兄弟に阿蘭陀医学を学んだ。この長崎滞在中の講義録のメモが五巻残されている。このメモをまとめて一冊の本にしたのが『紅毛医言』である。当時、阿蘭陀医学は外科のみといわれていたが、内科もあり、それを紹介した本邦初の西洋内科書であるといえる。またこの巻三には人体解剖図がありオランダ語と日本語を併用してある。なおこれは解体新書が発刊される十二年前のことである。長崎より讃岐へ帰る途中の肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧めめる。この関係は紅毛医言の序に詳しい。

弟に合田大介がおり、外科医として活躍した。安永二年六月一日(一七七三年六月一日)没、五十一歳。門人はその遺徳をしのび温恭先生とよんだ。

(富士川游 全集 温恭合田求吾先生 二四九〜二六〇 一部改変)

(註2) 吉雄耕牛の略歴

享保九(一七二四)生 長崎
寛政十二(一八〇〇)死 長崎

江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸佐衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩斎、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に入りして、寛保二(一七四二)年、一九歳で小通詞、寛延二(一七四八)年には大通詞となった。

(註3) 紅毛医言と西洋医述の關係

講義録は五巻からなる。第一巻の標題には元は阿蘭陀内治書、それを線で引き、紅毛医述と訂正してある。

巻二の標題には紅毛医言とし、巻三には始め紅毛医言と記し、それを消して西

洋医述としてある。

巻四及び巻五共に西洋医述の標題がつけてある。

これをまとめて一冊として出版しようと考えたようだが『紅毛医言』である。

以下に目次を書く。カッコは原文中に書かれている阿蘭陀語の発音である。

第一巻 紅毛医述 熱病(コオルツ)、瘡、腫脹、石淋、疝氣(コレイキ)、痢(ディヤセンテリア)、狂犬病、梅毒(スパンスポク)、

第二巻 紅毛医言 狂(マニア)、卒中風、傷寒(ヘエプリス)、小兒積氣、咳嗽、咯血、宿食、中風(パラレイジス)、疫(ペスラス)、小便閉、黃疸、翻胃、嘔噦、嘔吐、吐血

第三巻 西洋医述 卒倒、癩癧(カンカル)、小兒遺尿、

第四巻 西洋医述 小産(メラシコウリヤ)、痢症、閉経、帶下、癩、癩、

第五巻 西洋医述 咽頭痛(アンギイナ)、シキウルボイク

疾病は以上であるが治療法として諸種薬物の内用を主とし、薬物の効用について述べられたものは多い。

特殊の治療法として、吐法、汗法、下法、肛門突薬法、咳嗽、温泉療法、刺絡、カテーテル応用、種痘等である。

講義録の元本

講義録のもとになった教科書は何であろうかという疑問がある。

長与健夫はそのエッセイの中で合田強は『自宅内の塾でオランダの内科書(著者はJ・ゴルテルだったと思われる)を和訳するのを毎日聞き取って』と書いている(日本医事新報 No. 4286 (二〇〇六年六月一七日) 八〇—八二頁)。確かに共に一番最初の項目は『熱病』なのでそう思われたのかもしれないが、実際にはゴルテルではないようである。理由は以下である。まず、合田強の講義録第一巻の『熱病(コオルツ)』の記載は実際は一般的熱症ではなくマラリアのことであるのに対して、ゴルテルは熱病一般からときおこし、分類、原因、処方と進んでいく。また前掲の吉雄塾の蔵書目録の中にゴルテルは見当たらない。ゴルテルの内科書は宇田川玄随が訳本を作成し『内科撰要』として出版した。現在、原本と訳本は共に早稲田大学に所蔵されている。おそらく、一種類の本ではなく、数種類のそれぞれの専門書(解剖学、内科学、

薬用植物学等)を用いたと考えられる。明らかなのは、内科書はホイセン、植物はドドネウスである。これらは吉雄塾の蔵書目録二〇冊の中にある。また、本を読んで不明な部分は吉雄塾が直接阿蘭陀人医師に聞いたことが、紅毛医言の凡例の部分に書かれている。

(註4) 新撰洋学年表 一七六二年

紅毛醫言 讃岐 合田剛「ママ」撰 京医松原一閑斎門人但事歴未詳或云丸亀人

獨嘯庵叙 讃陽合田氏治長沙氏之術、而東西遊学、未滿其心、今茲正月、將之崎、過余居日、我受古方、于今二十年、其初以為、無不可治病愈入愈難、云々、既而、余亦有肥水之遊、不期而再會、則出其紅毛医言者、蓋合田氏就師吉雄氏、通解二方之語、以成卷者也、余聞之、則若汗若吐若下、与我道符、加舁、紅毛之政、不禁別人、故病不治、則死必剗、是以諸病所因、瞭然如指掌、噫仲景没後二千年、得其道於紅毛、可以補古方之缺、是合田氏精誠之所致、夫紅毛外科之術、流于東方、久乎矣、至于内科、聞乎無聞、斯書之行、世知有其内科与我古方符、則天下有志之士、糧遊于崎一者、比々相望、医言其嚆矢哉、云々先是言の蘭方内科に及ぶ者ありと云も書を筆して其説を述へたるも、亦此医言を以て嚆矢とすべし、但し本書不傳、此叙載せて、獨嘯庵の雜著なる葆光秘録にあり。

(註5) バウルの部分の註(この項は酒井シヅ著『日本の医療史』東京書籍 一九八一年(昭和五十六)を参考にしている)

バウル(G. Rudolf Baer)は宝暦八年から十二年(一七五二—五六)の間長崎に滞在した阿蘭陀商館医である。杉田玄白の『蘭学事始』の中で吉雄塾牛について述べている部分でバウルのことも書かれている。『明和四、五年の間なるべし、二世甲必丹は『ヤン・カランズ』、外科は『バブル』というもの、来たりしことあり。此カランズは博学の人、バブルは外科巧者のよしなり。大通辞吉雄幸左衛門は専ら此バブルを師としたりと、幸左衛門、外科に巧みなりとてその名高く、西国、中国筋の人長崎に下りその門に入る者至つて多し。(中略)一日右のバブル、川原元伯といへる医生の舌疳を診いて療治し、且つ刺絡の術を施せしを見たり。扱々手に入りたるものなりき。血の飛び出す程を預め考え、これを受くるの器を余程に引きはなし置きたるに飛び、る血丁度その内に入りたりき、是れ江戸にて刺絡せしの始なり。(中略)幸左衛門一珍書を出し示せり、これは去年初めて持ち渡りし『ヘーステル』のシュルゼインという

書なりと。われは深く懇望して境樽二十挺を以て交易したりと」

三巻の後半部では瀉血が多く書かれているが、時期的に見てパウルが行った手術を吉雄耕牛が学んだものと思われる。この部分ではパウルは内科が一で外科は次という記述である。その他の講義で話された外科手術はハイステル(Heister 一六八三—一七五八)の『外科学(Chirurgie)』によると考えられる[Chirurgieの訳は手術]。『カンカル』の部分の乳癌の手術はこの『外科学』によると考えられる。また合田強の影響を受け、吉雄塾で講義を受けた永富独簫庵の『漫遊雑記』にも乳癌の記述がある。さらに華岡青洲は『漫遊雑記』や『外科学』に影響を受けたとされる。

(註6)

帝王切開の原型が示されている。さらに子宮外妊娠と思われる記述もある。日本における最初の帝王切開が、伊古田純道により行われたのは嘉永五年(一八五二)で、九十年後である。

さらに賀川玄悦が本邦で開発した回生鉤胞術と同様の記述がある。ただし、賀川流が鉤を用いるのにたいして、吉雄流はハサミを用いたようである。この項は参考論文3を参照の事。

(註7)

病理解剖の必要性を書いているが、さらに、前年の九月から毎月病理解剖を行ったと書かれている。著者らは、当初これら解剖の図は教科書から写したと考えていたが、実際の解剖時に写生した可能性も否定できない。例えば、腸や胃を除いた図があり、その後に胃や腸の書かれた図を見ると、おそらく解剖の順に写生したと思われる。また、産科婦人科系の図を見ると、難産のため死亡した婦人の解剖では、胞衣と胎児の図がある。胎児が逆産であったのではないか。これらの解剖は新鮮に映ったことであろう。それは前野良沢や杉田玄白が解臍を始めてみた時の感激にもなっている。

さらに、前述の永富独簫庵の『紅毛醫言』の序の中にも出てくる。「不禁別人、故病不治、則死必劇、是以諸病所因、瞭然如指掌、」永富独簫庵も熊本で合田強とあった後に、勧められて亀井南冥と長崎に行くが、滞在中に病理解剖を経験したのではなからうか。それほどこの解剖は印象的であったのだろう。これは後に弟子の小石元俊に伝えられる。

(註8)

種痘の部分の註(この項は小川鼎三著『医学の歴史』中公新書 39 一九六四

年(昭和三十九)を参考にしている)

ジェンナーの牛痘法が論文として公表されたのは一七九八年六月に七十五ページの小冊『牛痘の原因と効能に関する研究』である。しかしこの年宝暦十二年(一七六二)はこれより三十六年以前である。牛痘法以前は人痘法が用いられていたが、これは以下の四分類であった。

- (一) 痘粒の漿をとりて之を種える衣苗法
 - (二) 痘児の衣を服して之を種える衣苗法
 - (三) 痂屑(かさぶた)の乾いたもの即ち旱苗を鼻孔に吹き入れる鼻乾苗法
 - (四) 痂屑(かさぶた)の湿ったもの即ち水苗を鼻孔に納め入れる鼻湿苗法
- ここに記載されている内容から考えれば漿苗法ということになる。さらにトルコより伝わったという記述から、一七二一年にコンスタンチノープル駐在のイギリス公使婦人メリーモンテューグがロンドンに持ち帰ったことと一致する。四〇年近くたってロンドンよりオランダに伝わり日本に伝えられたことになる。なお突然『種痘』という分類がでてきて、解説されるということより、講義の中でトピックのように話したと解釈した。おそらくパウル等の阿蘭陀商館医より吉雄耕牛に話されたと思われる。もし教科書からの引用であるなら、まず天然痘に関する記述があり、後に治療法という順で書かれるべきであろう。日本で最初の成功した種痘は寛政元年(一七八九)に筑前秋月藩の藩医の緒方春朔によって行われた鼻乾苗法である。しかし人痘法は時として生命の危険を伴うので一般にはひろく普及しなかった。